**№32　テーマ『良い人間関係をつくる実力』**

**講話日2008年7月28日**

**皆さん、こんにちは。昨日まで本当に毎日35℃以上の猛暑続きで、ようやく今日は雨が降ってちょっとホッとした感じですよね。外でお仕事をされる方は本当大変だったと思うんですけど。今日は愛の実力というテーマ続き、連続の内容で、前回は愛の本質についてお話をしたんですけど、今日はその続きで「良い人間関係をつくる実力」。そのために愛の力をどうつくるかをお話させてもらいたいと思います。**

**前回の愛の本質というのは何だったかを少し復習してから、今日の話に入りたいと思うんですけど、愛というのは考え方が違い、価値観が違い、立場が違い、宗教は違いという、自分と違うものを持っている人たちと仲良く生きていく力が愛なのであって、そういう人たちとは一緒にやっていけない人には、血の通った温かな心は存在しない。価値観の違う人とどうしたら一緒に仕事ができるんだろうと、思い悩み考える…そこに血の通った温かな心、温かな人間らしい心が出てくるのであります。だから、まず我々は愛の力を育んでいこうと思ったならば、考え方が違う、感じ方が違う、宗教は違う、立場が違う人たちと、どうしたら一緒に仲良くやっていけるのかということを考える。そういう努力をしなければならない、ということを話しました。もうひとつ、愛とは人間を愛するということなんだから、人間は長所も短所もあって人間なんだから、人を愛するということは長所も短所も丸抱えなんだと。長所は愛せても短所は愛せないだろうと思ってしまうんですけど、短所を愛せなければ人間を愛することはできない。その人を愛するということは、その人の長所も短所も愛するということなんだ。そのために我々は人の短所を愛するという力をつくっていく必要がある。そのためにはどうしたらいいのか。それを考えることが愛なんだと、お話をしました。**

**今日はでは、どうすれば一体我々は、考え方の違う人と一緒に仕事ができる愛の力を持つことができるのか。またどうすれば短所を愛する力をつくって、長所短所丸抱えで人を愛する力を自分のものにすることができるんだろうか。その方法論について、今日はお話をします。次回のテーマは、悪くなってしまった人間関係を修復するか、というテーマです。その前にベースとなる、良い人間関係をつくる力を成長させる。それが今日のお話なんです。**

**内容としては五項目の方法論というものがあります。良い人間関係をつくる愛の力を自分のものにしていくためには、五項目の努力の仕方考えなければならない。第一番目は、良い人間関係をつくろうと言うんだから、まずは人間への深い理解というものを持つことなしには、良い人間関係をつくる力を成長させることはできない。第一番目は、人間への深い理解というテーマになるわけです。愛の力を成長させていくために必要な人間への深い理解とは、何なのか。内容として二つあって、第一番目は、人間は誰でも心を満たすものを求めている。心が欲しいんだ。理屈ではない心が欲しい。これが偽らざる人間の命の叫びというか要求である。今日の時代に生きている人たちは、ほとんど誰でも理屈ではない、心が欲しいと叫び求めている。残念ながら現実は、家庭においても理屈で動いている。夫婦関係も理屈でお互いに話をしたり、またいろいろな生活の細々したことも、ほとんど理屈でお互いに意志の疎通を図っている。親子の関係も理屈が多い。会社の中でもほとんどの業務は理屈で動いている。皆、心が欲しいと叫んでいるにも関わらず、現実は理屈しかあげていないというのが、実状ではなかろうかと思います。**

**それがために、職場においても家庭においても心が満たされることはない。何かしら自分の求めているものはなかなか手に入らない。そういう苛立ちというか、不幸な気持ちが常に人間には存在するのだと思います。だけども、もう一度我々は、人は誰でも心が欲しいんだ。心を満たすものを求めているんだ。ということにもう一度ちゃんと意識を払って、人間というものに対応することを考えてみないといけないと思います。**

**近代という時代は、1600年頃から始まって今日までずっと近代という時代が続いてきたわけですけど、人間の本質は理性だと考えて、だから理性を成長させれば人間は成長するし、理性を成長させればいろんな物事をちゃんと正しく処理していくことができる能力が、自分のものになって、理性を成長させれば幸せになるんだ。という風に考えて、近代は理性教育というか知育偏重の理性を成長させるための教育だけをやってきたわけです。だけども、結果として何が起こったのかと言ったら、自然破壊・環境破壊・人間性の破壊ということになってしまった。人間性の破壊の中には、離婚の激増、幼児への虐待、高齢者の虐待、そしてちょっとした違いを理由にして人間同士が対立をし、憎しみあって殺しちゃう、戦争というものが起こってくる。これが理性というものを原理にして、理性を成長させることによってつくってしまった人間の現実と言っていいわけです。そういうところから、ようやく人類は人間の本質は理性ではない、心だ。感性だという人間観の大転換というものを今、果たそうとしているわけであります。**

**だけども、理性を成長させようとする教育が行われてきた結果、人間性を破壊され、心の喪失という状態に陥ってしまって、ほとんどの人が心をあげるとは何をあげることなのか、心を使う心遣いとは一体どういうことをすることなのか、相手の心を満たしてあげるためにはどういうことをしたら良いのか、ということがほとんど分からないような状況にはなってしまっています。実際問題、お父さんお母さんが自分の子どもを愛することは誰でもしているわけですけど、子どもからすれば、どんなに愛されていても「お父さんお母さんなんか全然俺のことを分かっていない」という気持ちになってしまっている。ということは、お父さんお母さんは子どもを愛しているつもりなんですけど、親の立場からの愛、自己中心的な愛で、本当に子どもが何を求めているのか、ということをちゃんと知って、愛しているのではない。愛しているつもりの愛。相手が愛を感じてくれなかったら、そこには愛は存在しない。相手が愛されているということを実感してくれて、初めて自分の愛は本当の相手を思いやる愛になっていると言えます。現実的には、ほとんどの人の愛は自己中心的な愛。愛しているつもりの愛。心の中には全然自分のことなんか相手は分かってくれてない、そういう気持ちは常に残っているのが、残念ながら現実の愛の実状であります。これは、恋愛の関係性、親子関係にあっても、夫婦の関係にあっても、あらゆる人間関係において、自分は相手のために努力してやっているつもり、自分はその人は愛しているつもり。努力しているんだけど、努力が空回りして相手の心を満たすようなことになっていない。それが現実の愛の実状ではなかろうかと思います。そのために、多くの子どもたちは親の愛を感じられなくなってしまって、そして愛の欠如ゆえのさまざまな犯罪あるいは非行に走るとなっています。それが現実の社会の姿です。**

**それでも人間が本当に求めているものは、心を満たすものなんだ。皆、心が欲しいんだ。だから我々は心をあげる力、心をあげる方法論をちゃんと自分のものにしていかないと、仕事もうまくいかないし、お客さんとの関係性もうまくいかないし、また家庭の人間関係もうまくいかない。そのことを改めてよくよく考えてみる必要があると思います。心をあげるとは何をあげることなのか。心をあげるとはどういう風にすることなのか。そのことを十分に考えていかないと、本当に良い人間関係をつくる力と素晴らしい人間関係をつくっていく力を成長させていくことはできないと思います。**

**とにかく、そういう意味で人間は誰でも自分の心を本当に満たしてくれるものを求めて生きているんですけど、やはり人間そのものが不完全ですから、求めていながらも残念ながら心は不完全なるがゆえに満たされない。人間は誰でも満たされない心を抱えて生きている心寂しき存在であることを、人間への深い理解として我々は忘れないようにしないといけません。人間は誰でも心寂し存在である。満たされない心を抱えている心寂し存在である。よく子どもの立場からは不平不満を言う。そして自分の心が満たされていないという原因を親に突きつける…そういうことをします。うっかりすると自分だけが寂しい辛い思いをしている、と。なぜ、人は分かってくれないのか。会社で言えば、「上司はなぜ俺の苦しさが分からないのか」と、上司に不平不満を言ってしまう。だけど、それは自分だけではない、上司もまた「なぜ部下は俺の苦労、努力を分かってくれないのか」と思って、嘆いているんだ。子どもからすれば、「なぜお父さんお母さんは…」と言うんだけど、お父さんもまた誰にも分かってもらえない、子どもにもまた妻にも分かってもらえない辛さを抱えながら、口に出さず頑張って生きている。お母さんも「なぜこの寂しさが子どもにも夫に分かってもらえないのか」と思っている。寂しいのは、辛いのは自分だけではない。誰にも分かってもらえない魂の叫びを抱えている。誰でもそうなんだ。父母子、祖父母、兄弟、姉妹、同僚上司部下、社長だってそうなんだ。皆、誰にも分かってもらえない孤独な魂の叫びを持ちながらも、それに耐えて頑張って一生懸命に生きている。というのが、偽らざる人間の姿であります。**

**ついついうっかりすると、「なぜ社長は、なぜ上司は、俺の辛さが分からないのか」となってしまい、いかにも上司にはそういう辛さがないような意識で、上司に不平不満をぶつけるということをしてしまいやすいのが人間なんです。だけど、人間への深い理解ということからすれば、自分だけがそうなのではない。上司だって立場は違えど、自分と同じように思っている。社長だって誰にも分かってもらえない孤独な魂を抱えて辛さを持ちながらも、言わないで見せないで、それに耐えて頑張って生きている。その姿を部下に見せないのが社長の心意気だ。孤独の魂の叫びというものを皆持っているんだ。そのことを常に我々は忘れてはなりません。それを忘れないようにしないと、良い人間関係をつくる力を成長させることはできない。自分本位に自分の不平不満をぶつけていたのでは、人間関係は良くなるはずはありません。**

**では、なぜ人間は孤独な魂の叫びを抱えて生きざるを得ないのか。それは人間の実質的な本質というものは、意志と愛というものであって、人間には誰にでも意志がある。であるが故に皆に認めてもらいたい、分かってもらいたい、褒めてもらいたいという気持ちを命に抱いている。また人間には愛がある。皆生まれてから死ぬまで愛されたい、愛されたいという欲求を持ち続けて生きて死んでいくんだ。基本的には誰でも人間は認めてもらいたい、分かってもらいたい、褒めてもらいたい、愛されたい、という心情を心の中に持ち続けて生きて死んでいく。皆、そういう欲求はあるんだけどだけども、誰も自分が思っているようには愛してくれないし、誰も自分が求めるようには認めてくれない。それがまた不完全なる人間の偽らざる現実だ。誰一人自分が求めるようには愛してくれる人はいない。誰一人自分が求めるようには認めてくれる人がいない。いかに激しい恋愛の最中にあったとしても、満たされているように端から見えても、本人にとっては求めているようにはなかなか愛してくれない。と思っているのが現実である。そこに満たされることのない心、命というものの現実があるわけであります。命が本質的に求めているものは、認めてもらいたい、分かってもらいたいということなんだ。そして、褒めてもらいたいということなんだ。愛されたいということなんだ。注意されたり、叱られたり、批判されたり、ということも人生には必要なことなんですけども、ただそれは残念ながら、命そのものの本当の欲求ではない。基本的に人間関係というものは、分かってあげる、認めてあげる、褒めてあげる、そして愛してあげる。ということが基本的にその人の命を満たす行為になるわけであります。**

**愛するということは別に恋愛的なことではなくて、愛するとは信じることである、認めることである、許すことである、待つことである。いろいろ具体的な実践内容というのはあります。決して恋愛的な意味にならないといけないというものではなくて、相手に対する肯定的な気持ちが愛の基本的な在り方なんですよ。だから、愛されたいということの中には認めてもらいたいということもあるし、こうしてもらいたいということもあるし、また待ってもらいたいということもあるし、信じてもらいたいということもある。全部愛の具体的な内容になっているんだ。そういうものを相手にあげることが、相手の心を満たしてあげるということになるわけです。現実的には叱ることも必要で、注意することも必要で、批判することも必要だということあるんですけど、それは本当の命の欲求ではないということです。まず基本は、分かってあげること、認めてあげること、褒めてあげること、そして愛してあげること、そこに相手の命を満たしてあげるという言動があるんだ、ということを忘れてなりません。**

**よく叱ってくれてありがとうございますとか、嬉しかったということをおっしゃる方もいらっしゃいますけど、やはり叱られるとか注意されることは、本当は嫌なんですよ。もちろん、それがなかったら不完全な人間というものを教育することはできませんけど、命が求めているものは分かってもらいたい、認めてもらいたい、褒めてもらいたいというのが、命の要求。だから、まずは叱る場合でも褒めてあげて、相手の努力を分かってあげて、その上でそれをちゃんとしてあげた上で注意してあげる、叱ってあげるということしないと、本当の相手の心を満たすような対応ということはできない。これが筋。まず褒めてから叱る。まず褒めてから注意をする。順序を忘れてありません。それだけでもまだ不足であって、本当に人間を成長させるためには、褒めて次に叱って次にもう一度褒めて終わる。三段構えの対応をやってあげないと、本当に相手の心を満たすという人間教育はできないわけであります。褒めて叱って終わると、「叱るためにまず褒めたんだ」と作為が見えますので、ついつい後味が悪いような形になってしまう。そのためにまずを褒めて叱って、次にもう一度褒めてクロージングする。もう一度褒めておくというのが、非常に後味のいい注意の仕方、叱り方になります。命は愛されたいんだ。命は認めてもらいたいんだ。命は分かってもらいたい、褒めてもらいたいんだ。それが命の根本の欲求であって、本質的に注意されたいとか、叱られたいとか、批判されたいという気持ちは持っていない。それを十分に認識して、それをよく分かって、そういう意味で人間の深い理解を持って人と関わらないと、善意でした注意・叱りが、うっかりすると相手との人間関係を壊し、また距離をつくってしまって、結果として思いもよらない事件が起こるようなことにもなってしまう可能性があります。心して考えなければならない問題だと思うんです。誰でも心が欲しい。**

**心が欲しいとは、愛されたい、認めてもらいたいと思っている。だから、どんな人でも皆、満たされない心を抱えて生きていて、愛されたい、認めてもらいたいと思っているんだから、その心にこちらが応えてあげることができさえすれば、どんな人とも仲良くなれる。仲良くなれない人間なんていないんだ。どんな悪人でも分かってもらいたいんだ。どんな悪人でも愛されたいんだ。それは命の欲求として、必ずすべての人の中にあるんだ。その気持ちにさえ応えてあげることができるならば、仲良くなれない人間なんていない。これが良い人間関係をつくるための第一原理と言うことができるものであります。よく叱ってもらって嬉しかったということをいう人もたくさんいらっしゃるんですけど、それは行為の中に自分に対する深い愛を感じた場合に限られるんですよ。ただ、叱ってもらって嬉しいことは絶対にありません。褒めてもらったら嬉しいけど、ただ叱るだけで嬉しいことはない。叱ることの根底に自分への好意があれば、自分のことを好きになってくれている、その人に叱られたとき、嬉しいんですよ。まずは命は愛されたいんだ。命は褒められたいんだということを決して忘れてはなりません。これが理屈ではない、心が欲しいという叫びに対する対応の仕方ということであります。**

**第二番目としては、人間は誰でも長所半分短所半分。人間は誰でも長所短所半分ずつ持っているんだということを常に忘れてはいけません。そして、長所も短所もあるものであって、なくならない。どんな人にも必ず長所は半分もある。どんな人でも必ず短所も半分ある。短所がなくなったら人間ではないんだ。あってこそ人間なんだ。短所はなければならないんだ。これもなかなか理性的な人には理解しづらい、新しい人間観なんですよ。人間には短所がなければならない。誰でもずっと学校では、「短所はなくしましょう」「短所がない方がいい」という人間観を押し付けられてきましたから、皆、常識的にいって短所をなくす努力をしないといけないと思っているんです。短所がなくなってしまったら人間ではなくなるんだ。短所がなくなってしまったら人でなしになるんだ。頭ではそうだと分かっても、実践的にそれを納得することはなかなか難しいのが現状ではなかろうかと思います。とにかく原理的に言って、短所がなくなったら人間ではない。短所があってこそ人間なんだ。だから我々は短所をなくす努力をしてはならないし、なくさせる努力をさせてはならない。これはなかなか理性的な人には納得できないことなんですよ。**

**「短所がなくなったらいいはずなのに…」と。なぜ短所をなくす努力をしてはいけなくて、させてはいけないのか。原理的には、短所をなくす努力をするということは、人でなしをつくることなんだ。人間ではない者のすることなんだ。だからやってはいけないという理屈になるわけですよ。もっと大事な短所をなくす努力はしてはならないという理由は何なのかと言ったら、人間の本質は心だと言われますけど、人間らしい心というのは謙虚な心なんですよ。謙虚な心というものは短所。短所がなくなってしまったら人間は謙虚な心をつくる原理がなくなってしまう。長所だけになってしまったら傲慢になるしかないんだ。短所をなくす努力をしたら、人間性がなくなってしまうんだ。実際問題、近代ずっと理性教育をして理性を成長させる教育をしてきました。その結果として心がなくなってしまった、人間性を破壊されてしまった。それは理性教育というのが人間に完全性を要求する教育だから。人の短所を発見すると責める。そして人間関係を壊してしまう。相手をムカつかせてしまう。人間関係がうまくいかない、人間関係が不得手な人がものすごく多いわけです。本当に素晴らしい人間関係、良い人間関係をつくろうと思ったら、まず短所はなくならない、短所をなくす努力をすることは無駄なんだ、というとことをちゃんと認識する必要があるし、短所がなくなったら人間でなくなるんだということを知る必要があります。**

**だけど、短所をなくす・なくさせる努力はしてはいけないが、短所はあっていいんです。単純に短所を肯定して開き直ってしまったのでは人間ではない。人間だけが持っているものではなくて、動物も植物もあらゆるもの、皆が持っているものが短所であります。どんなものも皆、長所短所半分ずつ持っているというのが、宇宙によってつくられた生き物の基本的な原理、姿なんだ。だけど人間以外の動植物は、自分の長所は何で、短所が何なのかを知らない。だから、知らなかったら人間ではない。それは動物の段階だ。人間になるためには、人間としての生き方をするためには、短所は、なくす努力はしてはいけないけれど、自分の長所も短所も知っていて、初めて人間としての生き方ができる。人間になるための基本は、自分の長所短所を知ることなんだ。知ることによって人間らしい心ができる。知らなければ人間らしい心はできない。人間らしい心をつくる基本は、自分の短所は何なのかを知ることなんだ。短所があっても、それを知らなければ人間ではない。非常に大事な押さえどころであります。知る努力はしなければならない。**

**そして、短所はマイナスの部分ですから、短所が出てきたら人に嫌われるわけなんですよ。だから短所をなくす努力はしてはいけないけれど、「君の短所はここだよ。これが出てきたら君は人に嫌われるから、あまり出てこないように注意をしないといけないよ」ということは、人に言ってあげなければならない。また自分の短所も出てきたら嫌われるので、あまり出てこないように注意をする。これが相手に対する思いやりであり、心遣いであり、愛。出てきても仕方ないと、開き直るのは動物だ。それは人間以前の命の段階である。人間らしい心のある生き方をしようと思ったら、短所はあっていいんだけど出たら嫌われるから、短所は出てこないように注意を心がけ、心構えが人間らしい血の通った温かな心、温かな心遣いをつくってくれるわけです。常にその人の短所というものをちゃんと認識して、そして短所が出てきたら嫌われるから、あまり出てこないように愛を持ってちゃんと相手に言っておいてあげる必要がある。また自分自身の短所もあまり出てこないように注意をするということが、相手に対する心遣い、思いやり、愛のひとつの在り方なんですね。**

**長所短所というのは、能力の長所短所と人間性の長所短所という両面があるわけです。能力の長所短所というのは、やはり個性として誰にでもあるもので、能力としての短所を発見したらそれは助けてあげなければならないし、また能力としての長所を発見したら、それを伸ばしてあげなければならない。そういう対応をする必要がある。人間性における長所短所とはどういうことなのか。性格が皆ありますが、プラス面とマイナス面があって、性格のプラス面が出てくると好かれる。マイナス面が出ると嫌われてしまう。という形で長所短所というのは出てくるわけであります。人間性とか性格とかという面における長所短所というのは、どういう風に理解するべきなのかということなんですけど、人間性というのは基本的な構造として性格と人格の絡み合い。という構造で成り立っているわけなんです。人間には性格という格と、人格という格がある。**

**性格というのは、自分ではつくることができない。気が付いたらこういうものになっていた。性格は思ってなれるものではない。性格はなってしまうものなんだ。性格は自然になってしまうもので、自分で作為的に意識的につくれるものではない。皆だいたい自分で分かっているはずですけど、気が付いたらこうなっちゃってたという感じなんですよ。個性ですから性格は変えようがない。自分が引き受けていかなければならないものなんですよ。人格というのは、持って生まれてくる人間はいない。自分が努力してつくっていくもの。性格にはマイナス面とプラス面があるんですけども、人格を成長させる努力、人間の格をつくる努力をしていくと、性格の持っているマイナス面があまり出てこないようになってきて、プラス面がどんどん出てくるという状態になっていく。そういう人間性にこうなっていけるんです。人間性における長所短所というのは、人格を磨く努力をすることによって、修正することができる。なくならないんですけども、あまり出てこないようにすることができるものであります。人間性というのは、いろんな人と付き合っていく場合に、人間性の幅をつくるとか豊かさをつくるようにしないと、社会は生きづらいものですからね。その意味で我々は人格を磨く努力をすることによって、自分の性格のマイナス面があまり出てこないなってきて、どんな人にでも好かれる、好きになってもらえる。そういう自分をつくっていくことができます。性格そのものを変えようとするのではなくて、人格を磨く努力、人間の格を成長させるための努力をすることで、その人のマイナス面があまり出てこないような人間性をつくっていけます。**

**このことも、社内教育・人間教育においては、よく分かってむやみに短所を非難することがないように心がけていく必要があります。大事なことは、性格を変えようとしてはいけない。自分で背負っていく以外にないんだ。大事なことは人格を磨くという努力をさせることなんだ。人格を磨くとどうなのかと言ったら、人格には高さ・深さ・大きさというものがある。人格の高さ・深さ・大きさをつくっていくという努力社内教育においてもグループ単位でお互いにこのことを戒め合いながら、人格の高さをつくり、深さをつくり、大きさをつくっていくという訓練をしていく。だんだんと性格によるマイナス面が出てこない自分というものをつくっていける。そして、人間性を成長させていく。それにより、どんな人と会っても相手に嫌な感じを与えないような、そういう人間性をつくることができるわけです。そういう意味で、性格という面においても短所はなくならない。だけども、短所を出てこないようにすることはできる。ここをちゃんと押さえておかないと、人間教育において間違いを犯してしまうことになってしまいやすいです。ムリに短所をなくさせようとする努力が、相手をムカつかせてしまって、そこに恨みを買ってしまって、うっかりすると殺されてしまうようなことになってしまうこともあるかもしれない。それほど性格についてあれこれ中傷する批判するということは恐ろしいことです。それは性格は変わらないからです。ついつい性格を変えようとして、あれこれ言ってしまう。それが相手に恨みを買ってしまう。よくインターネットのブログなんかで相手の嫌なところを批判する、注意する。それが相手を怒らせてしまって殺されちゃった…最近はある話であって、そんなこともよく考えてみる必要があります。**

**とにかく、基本的に短所はなくならない。だけども短所が出てきたら嫌われるから、短所が出てこないように注意をする。それはさせなければならない。自分も注意しなければならない。人間性において短所があまり出てこないような、どんな人とでも仲良くやっていける人間性をつくっていこうと思ったら、人格を磨く努力をすること。人格を磨くことによって我々は性格は変えられないけども、性格のマイナス面があまり出てこないような自分というものをつくることはできる。こういう人間への深い理解というものを持ってないと、人間に対する対応を誤ってしまって、結果として相手を怒らせたり、相手に恨まれたり、そういうことになってしまう。慎重に考えるべきところであります。**

**短所というのは、なくならないんだから短所を発見したらそれを責めるということは絶対にしてはいけない。発見したら助けてあげたい、助けてあげよう、助けてあげなくっちゃ、と思うのが血の通った温かな心なんだ。短所を責めれば、人でなしの行為だ。短所は助けてあげなければならない。そのために自分は長所を持っているんだ。自分の長所は人の短所を助けてあげるためにある。また自分の短所は人の長所によって助けてもらうためにある。それが相互補完というお互いにパートナーシップを組んで、関わり生きていくという基本的な人間関係の原理なんだ。人の短所を発見したら責めるのではなく助けてあげなければと思うことが大事なんだ。そこに血の通った温かな心が成長していく。これも基本的な原理として忘れてはならないことなんですよ。**

**先ほど、短所は出てこないように注意しましょうということを申しました。これは消極的な短所方法なんですよ。もっともっと短所に対して積極的な対応をする。短所を活かすという対応をしようと思ったら、どうしたらいいのか。短所を隠すのではなくて、出てこないように注意をするのではなくて、自覚的にわざと短所をさらけ出す。助けてもらって、そして自分のダメなところを助けてもらったら、「ありがとう」と助けてくれた人に感謝をして、相手を尊敬して褒め称えて恩を感じる自分というものをつくっていく。そういう短所の活かし方を覚えなければなりません。自分の短所をさらけ出すことに助けてもらう力をつくっていく。短所をさらけ出さないと人は助けてくれません。不完全な人間というのは、ダメなところが50%もあるんですから、本来人に助けてもらう力をつくっていかないと、人生は、社会は、生きづらいというのが本当のところであります。どんな人でも短所は50%持っていて、50%の短所をさらけ出して、そして人に助けてもらう。助けてもらうことによって、助けてくれた人に感謝をする。相手を尊敬する。相手を褒め称える。これが活人力という、人の存在を活かす、存在を輝かせる力になるわけです。人を活かす力、相手の存在に価値を与える力をつくるためには、自分の短所をさらけ出す勇気を持つということが、非常に大事な能力なんです。だけど、なかなかさらけ出すことは恥ずかしくて、できないという気分をこれまでつくられてきたものですから、ついつい短所を隠してしまって、いいところを見せようとする人が多いです。それは不完全な人間にとって非常に不自然なことで、かえってさらけ出さないことで自分が窮屈になって、自分が無理をしてしまうような辛い人生になってしまいます。もっともっと我々は短所をさらけ出して、人に助けてもらう力をつくっていくことを考えないと、素晴らしい人間関係をつくることはできません。**

**どんどん人に助けてもらって、そして相手に感謝をする。そのことによって良い人間関係ができていくわけなんですよ。誰も助けてもらわないという状況になっていてしまったら、傲慢になるしかない。もっともっと我々は助けてもらう力というものをつくることによって、人間らしい謙虚な美しい心をつくっていかなければならない。助けてもらって相手を褒め称えて初めて実のある褒め方ができる。その意味で、もっともっと助けてもらう力を持っていく必要があります。会社においては、どんどんと部下に仕事を与えて、そして部下に仕事与えるとは、自分の役職において部下に助けてもらう関係性をつくるということになるわけです。それをちゃんとやってくれたら、「ありがとう、君はすごい。本当に君を雇って良かったよ」と思いを伝えて、褒め称える。そのようにして社員は成長していくわけです。人を育てるためにも、我々はもっともっと部下に仕事を与えて、仕事をさせることによって部下を伸ばして成長させることを考えなければなりません。そのときにも人間は不完全ですから、失敗する。失敗は当然なので、失敗したからといってそれを叱ってはならないし、けなしてはならない。失敗しても失敗しても何回失敗しても大事なことは、失敗しても成功するまでやめさせない。成功するまで努力させる。成功したという成功体験を実感させてあげる。それが、実力というものをつくっていく人間教育の方法であります。失敗したら、決してそれを叱ったり責めたりしないで、「今度はどうしたらいいと思う？」と工夫をさせて、「やった」「できた」という感動と喜びというものをその人が持つことができるところまで付き合ってあげて、ヒントを与え、またちょっと手を貸してあげたりなんかしながら、その人の成功体験を持つところまで導いてあげる。それが不完全な人間を成長させる教育の仕方であります。**

**そのためにも部下が失敗したとしても、どんどん部下に仕事を与えて、そして部下を成長させるために協力してあげる。これが大事なことであります。ついつい素晴らしい能力を持っている上司は、部下に仕事をさせると何となく頼りなく思って、自分で仕事を背負ってやってしまう。かえって自分が辛くなってしまう。そういう上司も案外と多いわけです。部下が頼りにならない、信頼できない。そして自分でやってしまう。ある意味で心の狭い、人間を深く理解していない愚かな上司の姿であります。本当に人間性の豊かな、心温かな上司になろうと思ったら、上司の方が短所をさらけ出して、そして自分のダメなところはこうなんだと言って、そこを助けてもらう。そういうことをしながら人を育てていく。そういう社内での部下の関わり方を覚えていかないといけないと思います。**

**とにかく、長所短所というものをどのように活かして人と関わっていくか。ということが非常に大事な人間関係をつくるための基本原理です。短所はなくならない。短所の自覚が大事なんだ。どういう短所があるのかを知ることによって、自分は謙虚な心をつくることができる。短所は出てこないように注意をする必要がある。人の短所を発見したら、助けてあげようと思わなければならない。さらには自分の短所をさらけ出して、助けてもらう力をつくることだ。助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派なんだ。助けてあげるだけでは人を惨めにする。助けてもらって、初めて我々は人を活かす活人力を自分のものにすることができるんだ。助けてあげる力と助けてもらう力は同等の価値がある素晴らしい行為だ。もっともっと我々は助けてもらえる人間になる必要がある。上司になればなるほど、人の上に立てば立つほど、助けてもらわなければならない。でなければやっていけない。会社という組織は、社長が自分一人ではできないたくさんの仕事をしてもらうために人を雇ったんですから。だから助けてもらうために社員がいるんだ。助けてもらうために部下がいるんだ。もっともっと仕事を与えて、部下を成長させる。そういう関わり方を覚えていかないといけないと思います。**

**そして、短所だけに対応する方法のあとは、長所を見つけ出す努力をする。どんな人にでも素晴らしいところは半分もある。たとえホームレスの方でも原理的には、人よりもすごいところを必ず半分を持ってらっしゃるんだ。そういう目で見つめなければならない。どんな人を見る場合でも、相手の中には自分より優れたところが半分もあるんだ、という意識を持って見つめられねばならない。そうすれば相手を見下したり、相手を軽蔑したり、相手を非難したり、そういう嫌な目がだんだんと消えてしまいます。相手の中には、どんな人の中にも自分よりも素晴らしいところが半分あるんだ。どんな人も長所を半分持っていらっしゃるんだ。部下を見る場合でも、「必ずこいつの中には俺よりすごいところが半分もあるんだ」という目で見つめなければならない。部下を見下したり、あるいは軽蔑したり、非難するような嫌な目が自分から消えていってしまう。人の持っている良いところを見つけ出す力を自分だけにつくっていって、そして相手の持っている長所と付き合わしてもらう。相手の長所と関わって、付き合う。そうしないと、良い人間関係をつくる力は成長しません。相手の長所を見つけ出す力を自分の中につくる努力をして、そして相手のいいところを褒め称える努力をして、そして相手の良いところを伸ばして上げる努力をする。それが素晴らしい人間環境をつくっていくということにもなっていくわけですよ。相手からも感謝される。**

**よく「こんなやつに長所なんかあるか」と言いたくなる人もいるかもしれませんけど、人間は原理的にはどんな人にでも長所は半分あるので、半分ある長所が見えてこないということは、これは相手の責任ではない、自分の人間性の貧しさ、狭さ、未熟さ、それが相手の良いところが見えないということになっているんだ。そう思わないと、我々は自分自身を成長させることはできません。自分自身の愛の力を成長させようと思ったら、人を責めていたらいけない。人を責める気持ちがある部分だけ自分は成長できない。どんな人にでもいいところ半分あるのに、それが自分には分からないということは、自分の能力に問題があるんだ。相手のいいところは見えないということは、自分の人間性は狭いんだ。自分の人間性が未熟なんだ。自分の人間性が貧しいんだと思って、自分の人間性を豊かにしていく努力が大事なのであって、人を責める気持ちを持ったら、もうその人は人間関係においては決して幸せにはなれません。人を責める気持ちは醜い心をつくる。嫌な人間になってしまう。常に相手のいいところ見つけ出して、相手の長所と付き合わしてもらう。そういう自分をつくっていく努力をすることが大事です。社内の人間関係においても、常にそのことを忘れてはなりません。相手の長所と関わる。相手の長所と付き合う。ダメなところはどんな人間にも半分もあるんだから、そんなものは問題にしない。相手のいいところと付き合う、向き合う。相手と見つめあったとき、相手に好意を持って接している自分の目つき・表情というものをつくっていかないと、良い人間関係はできません。「嫌なやつだな」という気持ちがあれば、それは目に出てきますから、必ず人間関係は悪化します。**

**その意味で感性論哲学では、色紙に書く言葉なんですけども、「いつも目に愛の光を、いつも目に愛を忘れず」と。どんな人と対する場合でも、自分の目には相手に対する好意がなければならない。相手のいいところを見つけようとする意識がなければならない。相手の長所と関わろうという意識がなければならない。そうなれば、必ず目に愛の光が宿ります。目に愛の光を宿すためには、愛を伝えるためには、相手の長所を見出そうとする気持ちが根底になかったら、愛は宿りません。そして相手の嫌なところがあっても、それは許さなければならない。短所は半分もあってなくならないんだから、それは許さなければならない。短所は助けてあげなければならないものだ。常に長所と関わっていく。それが自分の目に愛を称えるための方法論であります。**

**お客さんと対する場合でも、本当にちょっとした言葉でお客さんに対して、嫌な感じを与えるような目つきになってしまうことがあるんですよ。自分では気付かなくても、「何か嫌なこと言うお客さんだな」と思ってしまって、ついつい目に相手への反感が宿るということがよくあります。それは、不完全な人間だからしょうがないところがあるんですけど、「いけない」と思って、お客さんの良いところを見つめようとする。そのことによって、すぐに嫌な目は相手に対する好意を持った目に変えていくことができます。そういう努力をしていかないと、素晴らしい人間関係をつくっていく力を自分の中に成長させていくとはできないと思います。ぜひ心がけてもらいたいと思います。とにかく、人間への深い理解というのはふたつあって、良い人間関係をつくるための基本原理です。**

**次は第二番目です。謙虚な理性の使い方。現在は考え方が違ったら一緒にやっていけない、価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがないという意識を持った人がほとんどなんですよ。これはなんなのかと言ったら、それは理性によって縛られ、理性の奴隷になってしまって、人間性をなくしているということの証明です。その意識は、自分自身が理性の奴隷となって、人間性をなくしているということを表現しているんです。だけど、ほとんどの人はそんなことは考えていない。常識に言って、考え方や価値観が違ったら一緒に仕事をできるはずはない、と言ってしまっているのが現状であります。それは理性の時代の人間観、理性の時代の仕事の仕方なんだ。理性の時代は真理はひとつと考えますから、皆が同じ考え方にならないと、一緒には生きていけませんし、同じ宗教の人としかやっていけないし、同じ民族としか一緒にやっていけませんし、同じ価値観の人としか一緒には仕事ができない。これは理性的な人間であるならば、当然なんですよ。それは、人間性がないという姿を表現しているんだ。そして、理性の奴隷となった人間の姿が、離婚の激増、幼児への虐待や高齢者への虐待、宗教戦争・民族戦争というものつくってしまっている。この現実を考えるならば、我々はできるだけ早く自分自身を理性の支配から解放する。本当に人間らしい血の通った温かな心を持った人間に戻る、ということを自覚的に進めていかなければなりません。**

**人間が理性の支配から解き放たれる状態になるためには、まず我々は理性能力とは一体何なのかということをちゃんとちゃんとの味の素でよく考えてみる必要があります。理性能力とは何なのか。これまでは理性というのは、人間に宇宙から、天から神から与えられた完全な能力なんだ、と考えてきました。理性は正しい、と考えてきました。理性は完全だ。それは人間に、神から与えられた能力だからです。だから不完全な人間は完全なる理性に従わなければならない、と考えて我々は、これまで理性で正しいと考えたことを実践する生き方を心がけてきたわけです。理性で考えたことを実践してきましたから、だから人間は理性の奴隷となってしまったんですよ。そして人間ではなくなってしまったんですよ。結果として人間性が壊されてしまったんですよ。そして心が破壊されてしまったんですよ。理性の奴隷となることによって、我々は人間ではなくなってしまった。それが現実の我々の姿です。それほどまでに、極端な意識、人間に対する理解を持っている人は少ないと思うんですけど、とにかく現在の人類は、全世界的なレベルで理性の奴隷だ。人間ではないと言うことができる現状であります。**

**だから、価値観が違ったら一緒に仕事ができない。感じ方が違ったら離婚してしまう。一緒には生活できない。自分の子どもが自分の言うことを聞かないとムカついて、腹が立って憎々しく思ってしまう。そして、虐待をしてしまう。これが理性の奴隷となった悲しい親の姿です。それで自分と違う考え方の人を敵と思う。完全に人間性が破壊されてしまって、血の通った温かな心を持てなくなってしまって、理性でしか生きられない。理性でしか人に対応できない状態にほとんどの人がなってしまっている。私も含めてそうなんですよ。**

**私もやはり自分と違う考え方を人が主張すると、なんかムカっときますからね。だけど、いけないなと思って心を入れ替えて、自分を修正していくんですけど、だけどやはり私も現代の人間として、多かれ少なかれ理性の奴隷という人間性を教育によってつくられてしまっている。非常に悲しい、情けない現実です。だけど、我々はこれから生きていかなければならないのは、個性の時代、個性を大事にしようという時代。画一化するという近代から、個性を尊重して生きていかなければならない時代に流れが変わってきているわけですよ。これまでは学生服とか制服、皆が同じ法律の下で生きる画一性を追求する、画一的な人間の生き方が求められてきました。その時代においては、理性を原理にして生きていて良かったんですけど、これからは個性の時代だ。**

**考え方も違っていてもいい。価値観も違っていてもいい。感じ方も立場も宗教も違っていてもいいんだというのが個性の時代。それを我々が皆と仲良く生きていこうと思ったら、必然的に価値観が違っている人と一緒に生きる、一緒に仕事をする、感じ方の違う人と結婚をして生活をする、性格の違う人と仲良くやっていける。そういう自分をつくってかないと、個性の時代は生きづらいですよ。同じ考え方ではないとダメ、同じ価値観の人としか一緒に仕事はできないという人は、個性の時代においては仕事はできません。実際問題、人の上に立つ人間というのは、必然的に何人かの自分とは違う性格、価値観、生活感覚を持っている人たちをまとめて、率いて統率力を持ってループをつくって仕事をしていかなければならない。そのためにはどうしても、人間の個性というのを認めて許してあげる力を持たないと、これからの組織はやっていくことができません。**

**どうすれば一体我々は、認め合いながら違った価値観の人と一緒に生きていくということができるのか。そのことを考えていかなければならない。そのためには、まず自分自身を理性の奴隷という立場から解放する。理性の支配から自らを解放する。ということを考える必要があります。理性の奴隷という立場から自分自身を解き放とうと思ったら、まず我々は理性能力というのは一体どういう能力なのかを見つめ直してみなければならない。いつまでも理性は絶対なんだ、理性の考えは正しいんだと思っていたら、我々は理性の奴隷から解放されることはありません。ようやく今、人類は理性というものがこれまで考えてきたほど絶対ではない、完全ではない、正しいものではないということをようやく気付き始めているわけです。それはどうしてか。理性を成長させて、理性によって学問をつくって、そして文化を発展させてきたんですけど、その結果として今人類は自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物、そういうものをつくってしまって、その中で苦しんでいるのが現実である。そういうところから人類は、理性を信じてやってきた結果、こういう問題が出てきたということによって、「理性能力というものはそれほど信頼の足るものではない」ということを我々は実感し始めている。ようやく理性に対する絶対的信頼が揺らぎ始めたという状況を今我々は迎えているわけであります。それを理性の揺らぎと言っています。その中で多くの人たちが「理屈ではない、心が欲しい」と叫び始めている。「理屈はもう十分だ、心が欲しいんだ」と叫び始めている。これが人間の命が、ようやく理性の支配から逃れ出ようとしていることの実証、証であります。**

**そこでこれから我々が、理性の奴隷から解放されて、人間が理性を支配して、人間が理性を使って生きていくということ。「理性よりも人間の方が大事なんだ」「理性よりも人間の方が素晴らしいんだ」ということをちゃんと分かっていくためには、まず理性というものこれからどのように考えていかなければならないかということなんです。これまでは、理性というのは、合理的に考えることできる素晴らしい能力だと言ってきたんですけど、これからは、理性能力というのは、合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力なんだ、という理解を理性に対して持って、我々は生活をし、仕事をしていかなければなりません。理性は決して絶対ではない。理性はこれまで人類を考えてきたように、決して理性は完全無欠のロックンローラーではないんだ。そういう認識を理性に対して持たなければなりません。理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力だ、というのはどうして言えるのか。**

**それは、理性能力というのは、どのようにできてくるものかを考えてみます。理性能力は、生まれたときには人間は理性を持っておりません。人類は140億個と言われる脳細胞を持って生まれてくる。多くの方々が、脳細胞がある、脳があるということを持ってして、理性の存在の証明と考えてしまっている。脳があるということは、考える力を持って生まれてきたんだと。潜在能力として理性は与えられているんだと考えていました。だけども脳は理性ではないし、精神ではない。脳は肉体なんだ。**

**脳という肉体が理性という考える力を持つためには、どういう順序が必要なのかと言ったら、まず脳というものが人間がつくった言葉を覚えなければならない。言葉と言葉とを事実に合うように結びつけていくという作業をすると、合理的に考えるという理性が出てくるんです。これが理性の誕生なんだ。まず脳が人間のつくったことを覚えて、それを覚えた言葉を事実に合うように結びつけていくと、合理的に考える力が脳に備わってくる。それを理性という。合わないように結びつけると、それは空理空論になって、嘘になってしまう。事実に合うように結びつけていくことによって、合理的に考える理性という能力になるわけであります。だから、現実的に自分の考えたことが正しいか間違っているかということをどう検証するかと言ったら、実証と言って自分の考えたことを事実に合わせて、事実に合ったら自分の考えは正しいと考える。これが実証的と言われる検証の方法であります。そういう風に考えても、言葉と言葉とを事実に結びつけていくという努力をすることによって、脳に合理的に考えるという理性が出てくるんだ。**

**ということは、理性という能力は言葉を結びつけていく能力ですから、言葉が持つ限界を背負っているんだ。理性は言葉と言葉が結びつかないと、理性という能力は出てこない。だから理性は言葉が持つ限界を背負っている。言葉は人間がつくったもの。言葉は人間がつくった不完全なものだ。どういう意味で不完全かと言うと、言葉によっては表現できないもの、言葉の表現から溢れてしまうものがある。それを実態と言います。実態は、言葉によってすくい切れない。実態は、言葉の表現から零れ落ちてしまう。言葉には限界がある。限界のある言葉を結びつけることでしか、理性という考える能力は出てこない。だから言葉が持つ限界を背負っている有限で不完全な能力だと言わなければならない。そういう風に我々は理性を考えることができるわけであります。そのことによって我々は、自分の理性でどんなに考えて正しいと思っても、それは決して完全ではない、絶対ではない。と、意識しなければならない。自分の考えは絶対的に完全ではないんだ、不完全なんだ。そのことを本当に分かってきたならば、自分の考えを人に押し付けようとすることはできなくなってしまいます。そして、自分と違う考え方に出会った場合には、自分の考えは絶対ではない、完全ではない。だから自分と違った考え方の人と出会ったならば、相手の考え方を参考にしながら自分の考えを成長させていく、という謙虚な理性の使い方ができてくることになるわけです。考え方も違う人から何かを学んで自分の考え方を成長させていくという生き方を覚えなければ、離婚の激増は止まりません。また宗教戦争はなくなりません。価値観の違う人と一緒に仕事をしていく力はできてきません。個性の時代を生きようと思ったら、どうしても我々は自分と違う考え方や価値観の人から何かを学んで、自分を成長させていって、そして自分と違った考え方の人に「君と出会えて良かった。君からこのことを学んで、こんなことに気付いてこんなに成長できました。ありがとう」と言って、違う考えの人に感謝ができる。そのことによって、ようやく個性の時代を考え方の違う人と仲良く生きる力ができてくるわけであります。**

**大事なことは、同じ考え方の人ばかりと付き合っていたのでは、成長しない。楽しいし愉快だけど成長しない。成長しようと思ったら自分にないものを持っている人と付き合って、自分にないものを相手から学びとって、そして自分の中にそれを取り入れることによって、自分の考え方を成長させていく。そういう生き方を覚えないと人間は成長するわけがない。同じ考え方の人ばかり一緒におっても成長はしない。そのことをよくよく考えてみる必要があります。なぜ自分と違う考え方の人から学ぶことをしなければならないのか。それは理性能力とは、確かにマイナスに評価すれば合理的にしか考えることができない。有限で不完全な能力と言えますが、理性にはプラス面もあります。それは、より良いことを考えることができるというところにあるんですよ。**

**なぜかと言ったら、理性は本当のことも言えますけど、嘘も言える。そこに理性能力の特徴があります。理性は本当のことを言う力も50%あるんだけど、嘘を言う力も50%ある。これが理性の積極的な価値なんですよ。嘘を言うとは、事実にはないことを言うということです。そういう力を持っています。それはつまり、事実によって支配されていない。事実によって縛られていない。そういう面を50%は持っている。そのことによって、まだ事実になってない未来に対応できる。事実は現在と過去しかない。つまり、まだ事実になっていない未来に対応できる。未来とは、夢であり希望であり理想であり理念であり目標だ。理性があるから未来に、希望や理想や目標を掲げることができる。**

**では、希望や理想や目標とは何かと言うと、それは「絶対にこうだ」ということではなくて、今よりもより素晴らしいこと、より良いことが理想であり、夢であり希望であり目標。理性という積極的な価値は、今より、より素晴らしいこと・より良いことを考えるところにある。理性をよく使おうと思ったら、プラス面のより良いことを考えることに活用すれば良い。そのためには、同じ考え方の人とばかり付き合っていたら、より良いことは考えられない。より良いことを考えようと思ったら、違った考え方、価値観の人と付き合って、自分にないものから学ぶことによって自分の考えに揺さぶりをかける。そして自分にないものを相手から学び取って、自分の中に取り入れる。そのことによって自分の考えを少しでもより良い形に成長させる。それができることになる。理性の持っている積極的な価値である、より良いことを考えようと思ったら、どうしても我々は考え方の違う人と共に生きて、そこから学んで自分を成長させる。そうしないと、我々は本当に理性能力を人間が支配して、それを生かして使っていくことができない。また、そういう自分をつくっていくことはできません。理性能力を考え方の人と共に生きていくことができる力に変えていく。そのことによって我々は謙虚な理性の使い方ができて、そして結果としていろんな人と仲良く生きていく力を自分のものにしていくことができるわけであります。これが人間を理性の支配から解放して、人間が理性を支配して、理性能力を使いこなして、いろんな考え方や価値観の人と一緒に生きていくという力をつくっていく方法論であります。これが謙虚な理性の使い方ということになります。今、二番目まで話しましたが、休憩の後に、三四五と話を続けていきます。**

**それでは後半の話に入ります。**

**先ほど理性という能力のプラス面とマイナス面、両面のお話をしました。理性能力というのは、合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力であるけれども、より良いことを考えられるところに理性の素晴らしい価値がある。このより良いことを考えられる理性の力を使って、人類は歴史をつくり、文化をつくり、時代が進むに従ってあらゆるものをより素晴らしいものしていく現実をつくってきたわけであります。人間以外の動植物は理性能力を持っていませんから、結果として人間のように歴史をつくるという生き方はできなかったわけです。感性論哲学は感性だけを大事にするのではなくて、理性能力もどういう風に使ったら人間が幸せになれるか、どうしたら理性能力を使いこなすことができるかも考えています。確かに人間を理性の支配から解放しなければならないと考えますから、これまでのように理性を絶対と考えるような立場ではありません。だけど、理性を使わないと人間は人間的な生き方ができません。人間らしい、人間的というものをつくっていこうと思ったならば、我々どうしても理性を使わなければならない。理性を使わなければ人間らしい世界は生まれていきません。だけども、理性で考えたことを実践しようと思ったら、人間は理性の奴隷になってしまって人間性が破壊される。人間が理性を支配して、理性を使いこなして生きていく使い方を覚えていかないと、人間が人間性を保ちながらも理性を使って生きる生き方はできないわけです。そのために、どうしたら我々は理性を使いこなして、理性を支配して、人間らしく生きるということはできるのか。それを考えていくために、考え方が違い、価値観の違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていくことができるのだろうということを考えて、理性を使って試行錯誤をする。理性を使って考える。それが人間的に正しく生きる、人間性を破壊されないで理性を使って生きる生き方なんだということなんですよ。理性的に正しい生き方をすれば、考え方や価値観の違いで対立をして、殺し合いしなければならない。**

**理性的に正しい生き方をするのではなくて、人間的に正しい生き方をしなければならない。人間的に正しい生き方とは何なのかと言ったら、「考え方や価値観の違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていけるんだろう」ということを理性を使って考える。これが人間的に正しく考えるという理性の使い方なんです。考え方や価値観が違う人とどうしたら一緒にやっていけるか、と考えることによって、血の通った温かな心を持った人間になれる。心が成長していく。考え方の違う人と一緒にやっていけないというところには、血の通った温かな心は生まれてくるはずがない。考え方の違う人と一緒にやっていけない、それは理性のみの判断だ。人間が人間らしい心を持って生きていこうと思ったら、常に考え方が違い、価値観が違い、宗教が違い、民族が違い、性格が違う人と、どうしたら一緒に仲良くやっていけるんだろうか…それを考えるために理性を使う。それが、人間が理性を支配して、人間が理性を使いこなして、人間らしく生きる・人間として正しく生きるということになります。それが理性の使い方。この違いをちゃんと理解しておいてもらいたいと思います。理性的に正しい生き方をするのと、人間的に正しい生き方をするのでは、原理が違う。理性的に正しい生き方をすれば、我々は殺し合わなければならない。人間的に正しいことをするために、理性を使うことによって、我々はいろんな人と仲良く生きていく力をつくっていくことができる。愛の力を成長させていくための手段能力として使うことができる。理性とは、自分と違う考え方の人と共に仲良く生きる力のことを愛というんだ。**

**だから、「考え方が違う人とどうしたら仲良くやっていけるんだろう」ということを理性で考えると、愛が生まれてくるんだ。それが人間が理性を支配して、人間のために理性を使って、人間性を破壊されないように心が成長する、そのことのために理性を使って生きるという方法論であります。この力を組織が持てば、組織の団結力というのはものすごく強くなる。いろんな考え方の人がお互いに力を貸して、お互いを成長させるために生きることができますから、これほどに大きな力が生まれてくる原理はない。だけど、考え方が違う人と敵対して、一緒にやっていけないということやっていたら、組織の力は分裂をして、弱体化していきます。これからの組織は、理性を原理にするのではなくて、愛を原理にして、考え方が違い、価値観の違う人とも一緒に仕事ができる力をつくっていく。そうすることによって、価値観を統一して仕事をしてきたときよりも、もっと素晴らしい仕事もしくは仕事の仕方ができる。もっと素晴らしい会社の中の団結力が生まれてくる。そのことのために我々は謙虚な理性の使い方を覚えなければならないわけであります。**

**次は第三番目で、人間に完全性を求めてはならない。人間は不完全だということをずっと言い続けてきましたけど、本当に人間は不完全だということが分かったら、我々は不完全なんだから、絶対完全ではないんだから、本当に人間は不完全だと分かったら、自分にも優しくなれるし、また他の人にも優しくなれる。自分に優しくなれない人間は、他人にも優しくなれない。よく自分には厳しく、他人には寛大にしようと思いますけど、それは現実的には不可能なことですよ。自分に厳しい人間は他人にも厳しくならざるを得ません。自分にも優しくなれて、初めて他人にも優しくなることができる。自分のダメなところを知って、自分のダメなところを許すことができて、初めて他人のダメなところも許してあげられる。不完全な人間が本当に安心して仕事をし、不完全な人間が安心して生きていける社会をつくっていこうと思ったら、どうしても人間は不完全だということを本当にちゃんと分かる自分をつくっていかないと、ついつい責め合う関係性になってしまう。そして、世の中を生きづらくする。いたたまれないような辛さをつくってしまう。本当に我々が組織の中で人間として、温かな心を持って生きていこうと思ったら、責め合うのではなくて、許し合って生きるというは気持ちを持たなければなりません。お互いに補い合い、助け合って、そしてパートナーシップを組んで、皆で協力しながら仕事を完全なものに近づけていく。そういう体制をつくっていかないといけないわけです。**

**人間に完全性を求めてはならないこととは、人間はとにかく長所短所が半分ずつあるんだから、お互いに短所を認めて許し合いながら、相手の短所は自分の長所で補ってあげて、自分の短所をさらけ出して相手の長所に助けてもらう、相互補完という関係性をつくっていくことが、まずは実践的な生き方になってくるわけです。現実的には多くの方が、不完全だということを分かっていながらも、相手につい完全性を要求して、相手のちょっとした失敗を責める。あるいは、何かしら相手を非難するような目で見つめてしまう。そうなっているのが現実であります。ひとりの人間に完全性を要求して、相手の欠点・短所・ダメなところを助けてあげなくては、補ってあげなくては、という気持ちを忘れてしまって、ついつい人を責めてしまう。相手に劣等感を与えてしまったり、やる気をなくさせてしまって、組織の中に居づらくさせてしまう。それが現実だと思います。**

**だけども、短所というものをそのまま放置してはならないので、単に許すのではなくてそれを補って助けてあげて、お互いに協力し合いながら完全なものに近づけていく関わり方をしていかないと、組織においてお客さんに満足してもらえるような仕事の仕方というものをつくっていくことはできません。組織の中にいる人間がお互いに責め合ったり批判したりしていたのでは、組織の有機的な団結力は落ちてしまって、ついつい失敗をしないような消極的な仕事の仕方になってしまって、仕事の質が落ちてくるし、また成長・発展への意欲がなくなってしまって、失敗しないような仕事の仕方しかしない消極的な人間をつくってしまいます。それがためにも、人間は不完全だということをどこまで本当に知って、その上でどうしたら素晴らしい仕事ができるのかを考えていかなければなりません。**

**不完全ということは、当然失敗もするわけなので、失敗したときにどう対応するかということなんですよ。これは有名な孔子の言葉にも「過ちて改むるに憚ること勿れ」。間違ったと分かったら、すぐにそれを改めようとする。それでいいんだということなんですよ。「過ちて改むるに憚ること勿れ」。過ち=失敗しているということは、恥ずかしいと思ってはならない。それは当然のこと。人間は不完全だから失敗するのは当然だ。間違ったら改めればいい。**

**「過ちて改めざる是を過ちという」。間違ったのに言い訳をしたり、言い逃れをしたり、なかなか過ちを認めようとしない。そこに人間としての大きな間違いがある。と、孔子は言っています。さらにどういうこと言っているかと言ったら、「人の過ちや各々そのにおいてす」。人間は皆、失敗する。不完全だからいろいろ失敗する。だけど失敗の仕方というものに個性があって、どういう風な失敗をするかによって、その人物の値打ちが決まるんだ。失敗しないような人間はいない。**

**うまくいっているといっているときは、人間の値打ちはどうなのか分からない。どういう失敗の仕方によって、その人間の値打ちが出てくるんだ。そういう人物観を持っているんだ。その人の値打ちに相応しいような間違いしかしない。その人物のレベルによって間違いの仕方が違う。どういう風な間違えの仕方をするかによって、その人物のレベル、人の価値、その人の人間性の段階が分かる。どんな間違い方をするかによって、その人の人格が分かるんだ。**

**これも人間をどう評価するかという面において、非常に大事な着眼点を持った言葉だと思います。「過ちて則ち改むるに憚ることなかれ」。間違ったら堂々とそれを改めようとする努力をしたらいいんだ。「過ちて改めざる是を過ちという」、「人の過ちや各々そのにおいてす」、「過ちを観て斯に仁を知る」。それほどに人間にとって間違う、失敗をする、過ちを犯すということは、誰にも当然あるべきことであって、それ自体を責めてはならない。間違ったとき、その間違いにどういう風に対処するか、どう対応するかによって、仕事というものの成長、良い仕事ができるようになるか・ならないかが決まる。また間違いにどう対処するかによって、その人の人物も決まる。**

**現実的な仕事の仕方に置き換えるならば、どんどんと上司は部下に仕事を与えて、失敗しても責めない。失敗は当然なんだ。だから、どうして失敗したのかということをちゃんと調べて、そしてどうしたら今度は失敗しないようにできるかをお互いに相談して考えて、「じゃあこうやってみよう」とやってみて、また失敗したら、それでも責めないで、「今度はどうしようか」と考えて、何回も何回も失敗を重ながらも最後に上手くいったという結果が出るまでやめない。これがやはりお客さんに対しても、最高の満足を与えていく仕事の仕方になってくる。よく企業なんかでは、自分のやった仕事に対してお客さんが不満を持ったとき言い訳をしたり、無理にそれでいいんだということを相手に納得させるような説得をしたりして、結局自分を正当化するような対応をしてしまう会社も随分とあります。**

**あの三菱自動車が、いろんな問題を起こして世間から非難されたときに、三菱自動車はどう言ったかと言ったら、「三菱の車全部に欠陥があるわけではないんだ。その内の何台かに欠陥が出てきたんだ。それは客の使い方が悪い。三菱自動車の技術には問題がないんだ」と客を非難して、そして自分たちの至らざるところを言い逃れして、欠陥を認めないという対応をして、ますます苦境に陥っていった経緯があります。往々にして企業というものが陥りやすい問題点なんですよ。ついつい自分たちのやっていることは欠陥がないと思ってしまいやすい。だけど客から出てくるクレームとか、いろいろ問題点が出る。それを人間は不完全だという意識のもとで受け止めていくことによって、さらに自分を成長させていくためのきっかけにできる。自分たちは問題のない仕事の仕方をしているんだ。だから、そこから出てくる欠陥というのは、自分たち以外のところに原因がある、と責任転嫁してしまう。自分たちの技術の成長というものに、思いを致さない。そのようにして、結果として会社はダメになっていく。成長しなくなってしまう。そういうことになりやすい。その意味でもやはり、我々は人間が不完全であるということを常に認めて、人間に完全性を求めない。そういうところからいろんな不平不満・問題点をプラスに自分が受け止めていって、そして自分の成長の糧にしていく。そういう謙虚で柔軟な対応をしていかなければなりません。**

**実際問題、建築なんかの場合でも、客の使い方によってあるところが非常に早くダメになっていく、問題点が出てくるということもあると思うんですけど、それに対して謙虚な、誠実な受け止め方をしていって、そして客を責めるのではなくて問題点が出てくるということに対して、これからどういう風に対応していったら良いのか、ということを考えて、それを会社の発展あるいは仕事の仕方における心遣いの成長に、どう関係させていくか。それを考えていかないと、建築会社においても、仕事の質が向上し、また客に満足を与えることができるような建築を提供していくという結果に結びつけることができなくなると思います。人を責める気持ちがある分だけ自分は成長できない。本当に重要な人間関係における基本原理です。常に自分がやっている仕事は不完全だということを、自分が忘れないならば、常に謙虚な対応があらゆることにおいてできる。自分は完璧にやったんだという気持ちがあれば、ムカついてくる・腹が立つ。だけども、人間のすることは皆不完全だ。だからいろんな角度から、いろいろ不平不満や文句を言われても当然。という気持ちがあれば、非常に柔軟に、寛大に、優しくいろんな問題に対応できて、誠実な仕事の仕方ができていくことになっていくわけであります。**

**人間は不完全ということが、どういうことなのかということをもっともっといろいろな観点から、深く理解していく必要があるわけです。単純に人間は長所半分短所半分という問題だけではなくて、人間は不完全だということはどういうことなのかと言ったら、基本的には人間は不完全だから失敗もする。嘘も言う。裏切ることもある。だますこともある。犯罪も犯すことがある。それが人間は不完全だということの意味なんです。それが本当に分かったならば、誰かが自分に嘘を言ったとき、「あいつは自分に嘘を言った。だからもう友人ではない」と、相手を切ってしまう。そういうことをすれば、その人は人間に完全性を求めている人だということになるわけです。人間というのはどういう存在なのか、ということをちゃんと知っては生きていない。人に完全性を求める人間は、常に人を非難しようとする。人を苦しめる。自分のことを棚に上げて、人を責めることをどうしてもしてしまう。それが人間に完全性を求める人間の醜さであります。**

**本当に人間は不完全だということ知ったならば、誰かが自分に嘘を言ったとき、「それが人間だ。それが人間というものだ」と受け止めることができて、誰かに嘘を言われたからと言ってムカついたり、相手を非難するという短絡的な行動にはなっていかない。そして反対に嘘を言う人間というものがどんなに苦しいか、どんなに辛いか、どんなに悩んだかということを分かってあげることができる。そういう血の通った温かな心がでてきたりする。相手が自分に嘘を言うからムカつく。だけど、自分が誰かに嘘を言わなければならないような状況に追い詰められたとき、自分はどんな気持ちか。それを考えたら、誰でも相当に悩みます。皆苦しみますよ。自分が誰かに嘘を言わなければならないような状況になったとき、自分の心をちゃんと分かっているならば、誰かが自分に嘘を言ったとき、「相当悩んだだろうな」「苦しかったろうな」「かわいそうにな」と思ってしまうはずなんですよ。責めるよりは人間らしい血の通った温かな心を持っていたら、嘘を言った人間に対してかわいそうという気持ちにもなれる。人間が不完全だということ本当に分かったら、誰かが自分に嘘を言ったとき、「それが人間だ」と軽く受け止めることができて、自分の心が傷つかない状態になる。本当に人間が不完全だということが分かっていたら、嘘を言われたから、騙されたから、裏切られたからと言って自分の心が傷ついて、嫌な気分になっているようでは、これは人間としての意識、自覚が浅いと言わざるを得ない。本当に不完全な人間が組織の中で、社会の中で逞しく生き抜いていこうと思ったら、基本的に何が必要かと言えば、嘘を言われても騙されても裏切られても、傷つかない心を持っておかないと、人間社会の中で逞しく、人間性豊かな人間として生きていくことは難しいです。**

**そういう心情に自分がなるためには、どうしても人間に完全性を求めないという自覚というものが、自分の中に必要だ。よく泥棒に入られた家の主人が、泥棒に「そんなことをするようなところまで追い詰められていたんだ。辛かったろうね、大変だったね」と言ってあげると、泥棒に入ってきた人が主人の前で泣き崩れてしまって、自分の辛さが分かってくれたという思いもあって、泥棒する気がなくなってしまって、家の主人の前で大泣きして、「警察に付き出してください」という話が何個かこれまでありました。家の主人が、「いや、もう辛いことは人生お互い様だ。もうそこまで分かってくれたらもういいから、これから心改めてしっかり生きていくんだよ」と言って解放してあげた。そのことによってその人がもう一回真面目に生きていこうという気持ちになって、ようやく生活を立て直して、そして普通に生活ができるになったとき、もう一度家を訪れて、「あのときは本当にありがとうございました。おかげさまでこうなりました」とお礼をしに来たという話があるわけであります。そこに人間らしい血の通った温かな心、温かな心を持った対応というものが象徴的な形で出てきているわけです。**

**なかなかそういう対応は難しいですけども、だけども本当にこれから我々が迎える心の時代、本当に人間性と血の通った温かな心を持って、仕事をし、人間に関わり生きていくといくことをやっていけるようになれば、そういう生き方、心遣い、対応がいろんなところでできていくように成長していけるはずなんです。とにかく、嘘を言われても裏切られても騙されても、傷つかない心をどうつくるか。嘘を言われても傷つかない心のことを人間らしい強い心というわけであります。嘘を言われていちいちムカついているようでは、弱い心なんだ。人間は不完全だということを本当には知らない、弱い、浅はかな心なんだ。本当に人間が不完全な人間として強く生きていこうと思ったならば、どうしても嘘を言われても裏切られても騙されても、「それが人間だ」という受け止め方ができて、そしてそれによって自分が傷つかないでかえって嘘を言った人間、騙した人間、裏切った人間の辛さを分かってあげて、そして、その人が立ち直れるように導いてあげる対応ができることになっていくわけであります。これも心の結びつきをつくり、人間が素晴らしい人間関係をつくるために大事な原理なんです。人間に完全性を求めてはならない。嘘を言われても、そのことによって傷つくようでは弱い人間だ。**

**具体的には、子どもがよく成長過程で親に嘘を言うことがあるわけです。そのときに、お父さんお母さんとしては、「嘘を言ってはいけない」と言って子どもを叱る。嘘を言わない子どもをつくろうと思ってしまうんです。これは完全性を要求している。子どもを殺しているんだ。人間として認めていないことになるんだ。一体どうしたらいいのかと言えば、子どもが嘘を言ったとき、決してお父さんお母さんは怒ってはいけない。間違った対応をしてはならない。どういう対応をするのかと言ったら、「あなたが嘘を言うような状況に追い詰められて、苦しんでいたのに、なぜ親なのに早く気が付いてあげられなかったんでしょう。ごめんね、許して」と言って、子どもを抱きしめて涙を流さなければならない。そのとき、子どもの心に親の愛がジワッと染み込むんですよ。だけど、うっかり理性的になって、嘘はダメと注意したら子どもはどうなるのか。本人が一番分かっているんですから、「嘘はダメではないか」と言われたら、「それぐらい分かっている。なぜお父さんお母さんは追い詰められたのに、この気持ちを分かってくれないんだ」と、反感になってくる。結果として「お父さんお母さんは全く自分のことを理解していない。もう何を言ってもムダだ」となり、だんだんお父さんお母さんに話さなくなって、辛さが分かる友達を求めて、グレていってしまう。そういう道筋を辿りやすくなる。**

**そういう道に立ち入らないようにするためには、どういう対応すべきか。本当に人間は不完全だということちゃんと分って、嘘を言った子どもを責めない。かえって嘘を言うことがどれほど辛いかを分かってあげて、「そんなつらかったのに、なぜその辛さを早く分かってあげられなかったんでしょう。ごめん、許して」と、子どもを抱きしめて涙を流す。そうしたら子どもは分かってくれたと、嬉しいと感じて親の愛が命に染み込む。しかし、そこで終わってしまったら子どもを堕落させて甘やかしの愛になってしまう。人間教育のためには、抱きしめた後に「だけど、やはり嘘を言うことはダメだ」と言わなければならない。嘘を言うことが平気でいるようではダメ。「今度、嘘を言わなければならないほど追い詰められたときは、お父さんお母さんに相談をしてね。あなたひとりに辛い思いをさせないから」と、言ってあげるのが親の子どもに対する愛であり、教育です。それが、人間は不完全だと分かった人間の、嘘という人間的な問題に対する対応方法です。**

**常に問題を起こした人間というものの心の中を見つめてあげて、そうなるまでの心の遍歴、流れとして、「どんなにつらかったのか、どんなに苦しかったのか、かわいそうにな」と思ってあげる。そういう心情がなかったならば、人間は不完全だということが分かった血の通った温かな対応が人間にできるという人間になっていない、ということになります。多くの子どもたちが万引きしたり、いろんなことで警察のお世話になるということが度々あるわけですけども、そういう子どもの行動の悪い面だけを見て、子どもを責めるということしていたのでは、そういう問題はますます広がっていってなくなりません。子どもが警察に捕まって、お父さんお母さんが警察に迎えに行く。その場合でもついついお父さんお母さんは警察に行ったら、子どもがご迷惑をかけてすいませんでしたと警察に謝る。当然そうすると思っているかもしれませんけど、親が警察官に謝っている姿を見たら、子どもはどう思っているか。子どもというのは、「何を善人ヅラして謝っているのか。俺はこうなったのはお前らのせいだ。なにを善人ヅラして」という気持ちになっているんですよ。**

**実際問題、お父さんお母さんは、「子どもが万引きした。子どもが悪いことをした。自分は何も悪いことをしていない」と思っているから、謝れる。だけど、子どもからしたら、こんなことをするような人間になってしまったのは、親の自分に対する心無い言動があったんだ。ということがあるものです。もうそうなったら、子どもはますます親の心から離れていていってしまって、信頼を無くしてしまいます。どうしたらいいのか。警察に行ったらまず自分の子どもがどこにいるのかを聞いて、子どもの姿を見たら一目散に子どもの所へ駆けつけていって、子どもを抱きしめて、とにかく無条件に子どもを抱きしめて、「ごめん、許して。つらかったろう」と言って子どもを抱きしめて涙を流さなければならない。そのときようやく子どもは「お父さんお母さんは俺の辛さ、苦しさを分かってくれている」と思って、親の愛を感じるんですよ。だけど、それだけで終わってしまったので、子どもを堕落させてしまうことになってしまいやすい。次にもう一言どう言わないといけないか。「今度苦しくなったら、早くお父さんお母さんに相談しに来てね」と。「一緒に問題を乗り越えて生きていこうよ」。その言葉で子どもは親を信頼して、そして親としての愛情を感じながら生きていくという気持ちになっていくことができるわけです。そのためには人間は不完全だけども、決して嘘を言ったり騙したり裏切ったりということを当然のことのようにやっているのではない。誰もそうしたくはない。人間は不完全だから、心ならずも失敗をし、心ならずも嘘を言わなければならない状況になってしまって、心ならずも裏切らざるを得ない状況に立ち入ってしまうのが、不完全な人間の悲しい現実だ。であるが故に、我々は罪を犯し、失敗をし、嘘を言った人間の辛さ、苦しさというものを分かってあげようとする努力が大事なんだ。そこに血の通った温かな心、温かな心を持った人間としての生き方がある。それを単に理性だけで相手を非難して、相手を罵倒しているようでは人間は不完全だということに対して全く理解がないという状態になってしまう。**

**決して嘘を言うこと許すのではない。嘘は言ってはいけない。不完全なるが故に嘘を言わなければダメな状況に立ち入ってしまうのも人間の悲しい現実だ。だけど状態になったときに、「早く俺に相談してくれ、友たちではないか」「一緒に問題を乗り越えて相談してやっていこうよ」と言ってあげるのが血の通った温かな心を持った愛なんですよ。単純に失敗や罪や嘘を責めたのでは、残念ながらそこには人間らしい温かな心はありません。とにかくまずは基本的に嘘を言われても裏切られても騙されても、傷つかない心。これが人間らしい強い心と言うことができるものだ。それを持たないと、不完全な人間社会を力強く人間としての心をなくさないで生きていくということは難しい。できない。こういうことがちゃんとできてくれば、確実に組織の中に心の繋がり、お互いの心の結びつきというものが強くなっていく。そのようにして組織は心の繋がりというもの持って、あらゆる理屈を乗り越えて、問題を協力してか解決していく。そういう団結力のある強い組織になっていくわけであります。これからの組織は、まず人間の本質は心なのだから、まず心の結びつきを企業の中にどう構築するかということが根本で、心の結びつきをつくる最も大事な原理が共感同苦、共感同悲。相手の悲しみを我が悲しみとして感じる。相手の苦しみを我が苦しみとして感じる。相手の辛さを我が辛さとして受け止めてあげる。そこに組織というものを強靭な団結力を持った命あるものにしていくという原理があります。**

**まず組織は、心の繋がりをつくっていかなければならない。人間と人間の心の結びつきを組織の中にどう構築するか。それがこれからの心の時代、感性の時代の重要なテーマである。その心の結びつきを土台に据えながら、その上に仕事の結びつきをつくり、その上に役職の結びつきをつくっていく。という構造が、これからの企業の健全な姿であります。でも残念ながらまだまだ現実の組織には心の結びつきがなかなかできなくて、単に仕事の結びつきと役職の結びつきだけで、理性で動いているという組織。だから皆辛い、皆お互い何かしら責任逃れをするような、責任転嫁するような、責め合うような気分が、どうしても理性的には出てきてしまう。そこを不完全なるが故に出てくる問題を共有しながら、助け合って生きていくという人間らしい強い組織をつくっていこうと思ったら、心の繋がりをどうつくるかが大事なテーマになります。**

**とにかく人間に完全性を求めてはならない。人間は不完全だということを自分に言い聞かせながら、一つ一つの出来事に対応していくか。どのようにいろんな事件の中で、血の通った温かな心があるということをどのように言動で見せていくか。そのことをもっともっと我々は真剣に考えていかないといけないと思います。そのことがちゃんとできることによって、我々は考え方の違いや価値観の違いを超えて、お互いに協力し合って力を合わせて生きていく気持ちを持った仕事の仕方ができていきます。**

**心の繋がりができれば、兄弟仁義の世界で本当に理屈を超えた人間付き合いができる。兄弟仁義と言っても、若い方々はその歌を知らないかもしれませんけど、「俺の目を見ろ。なにも言うな」という男同士の腹の内。お互いにも心の結びつきができれば、事の善悪を超えてどんなことでも協力してやっていける。そういう理屈を超えた人情の社会というものがあるわけです。心の結びつきを大事にしていくのが、これからの心の時代の大事なテーマです。残念ながら今、心の結びつきというものは家庭においても切れている。組織においても切れている。理屈でしか繋がっていない。ここに弱さがあるわけです。心の結びつきをつくるためには、人間が不完全なことに対する思いやり、理解というものがどうしても必要だということをよく考えてみてもらいたいと思います。**

**第四番目、良い人間関係をつくるための原理は、勝つことより素晴らしいことは力を合わせて共に成長すること。これまでの人間の生き方というのは、勝たないといけない。負けてはいけない、という競争して勝つということに最大の目標と価値を置いていた。現在は競争意識を目的に仕事をする人間は醜い人間だという評価が出てきております。受験競争を見るまでもなく、競争意識ほど人間の心を蝕むものはない。競争意識ほど人間から人間性を奪ってしまうのものはない。まだまだ現実には競争という関係性があって、そして競争に勝つということを意識しないと人間は成長しないんだ、という風に考えている人がまだまだ多い。競争なしに発展はないと。だけども、一方では受験競争やいろんな意味で競争というのは社会にあって、競争させられることによって精神的に苦しんで、心が荒れ果てて、段々と血の通った温かな心がなくなってしまって、そして人を敵と思うような冷たい心情に陥ってしまって、仕事にも人生にも喜びがなくなってしまう。そういう状態に陥っている人が本当に多いです。結果としていろんな精神の病を持ってしまう。**

**現実を考えたならば、これまでのように我々は競争しか成長・発展はないという価値観から脱却しなければならない。そして競走とは違う新しい成長・発展の原理を人間にも会社にも企業にも見出していかなければならない時代になってきている。では競争とは違う成長の原理とは何なのか。競争よりも素晴らしい人間の価値観とは何なのか。そう考えた場合、競争して勝ったら負けるものをつくってしまう。だけど力を合わせれば、共に成長できる。だから競争して勝つ負けるものをつくってしまうよりも、力を合わせて共に成長する方が、より質の高い生き方だということが分かってくるわけであります。そういうところから、これからの時代を生きる人間は、勝つことよりも力を合わせて共に成長することに人間としてのより大きな喜びと価値を感じる感性、という人間性が要求されてくる。勝とうとする生き方よりも、力を合わせて共に成長していくという生き方を選択する。そして、力を合わせて共に成長することの方が、人間としてより高度な生き方であり、人間としてより価値のある生き方なんだ。という意識をつくっていかなければなりません。勝つことよりも力を合わせることに人間としてのより多くの喜びと価値を感じる感性。**

**なぜ今それが大事なのか。会社が発展するとか会社が利益を上げるということのための原理は、ふたつしかないんです。それは、会社が発展して利益を上げていくための基本原理の第一番目は、消費者の要望にどこまで的確に応え続けるか。その努力です。結果として消費者の要望に的確に応え続ける努力を、より効果的にできた企業が生き残っていく。それができなくなってしまったら、その企業は衰退していく。それが現実に消費者との対応において出てくる盛衰の原理です。消費者の要望にどこまで的確に応え続けるか、という企業の活動は消費者に主体性を奪われた、消費者に振り回される企業の在り方とも言えます。一応は、消費者の要望に応え続けるということは、50%だ。あとは、企業人がプロとして誇り高い生き方をしようと思ったら、ただ消費者の要望に応えるだけの相手に主体性を奪われた、相手に振り回される生き方ではなくて、消費者すらまだ気が付いていない、まだ見えていない素晴らしい可能性や未来というものをプロとしてつくり出す。またそれを消費者に見せることによって、消費者の消費活動や欲求をより高度な消費活動に導いて売る。そういう仕事の仕方をしていかなければならない。消費者教育をしながら、素晴らしい購買活動へと導いていく。より素晴らしい未来を与えていく。そういう仕事がプロとしての誇りを持った利益の上げ方と言えます。**

**原理的に入って企業が存続し、発展し、利益を上げていく基本原理はそのふたつしかありません。だから、両方とも競争して勝つという原理とは違うわけですよ。消費者の要望に応え続けていくためにも、また消費者が知らない未来を見せて、そして消費活動を誘導し導いていくという活動に共通することは、クリエイト。創造力を企業が持つことなんです。競争して勝つのではなくて、どのように新しいものをつくり続けていくか。クリエイティブな活動に企業の命があると言えます。そのためには、どういうことを考えなければならないか。現実的には同業者がたくさんあったならば、競争という関係性はなくならないですよ。常に同業他社というものを意識に置きながら、他社との競争関係の中で、生き残ることを考えていかざるを得ない。それは残念ながら企業活動においては浅い。ある意味で企業の社会的貢献としての目的を見失って、ただただ同業他社との勝ち負けという関係性に意識を集中してしまう結果として、出てくる企業の在り方。本当に企業が社会的存在、意味、価値という存在価値を明確に持ちながら生き始めれば、必然的に企業というのは同業他社を相手にして仕事をする、そういう平面的、浅い意識からだ解き放たれていくはずであります。**

**だけど現実的には同業他社があったならば、競争という平面的な関係性も存在します。そこで大事なことは、競争という関係性が出てくるエネルギーを、同業他社をぶっ倒せという醜い、対立的な方向性に持っていってしまうのではなくて、競争のエネルギーを内面的に消化して、競争という関係性から出てくる自己変身、自己創造、自己変革のエネルギーに変えていくという企業の在り方というものをつくっていかなければなりません。同業他社と競争してより優れた技術をつくろうとか、より良い製品をつくろうとかという形に持っていてしまうのではなくて、同業他社との間から出てくるエネルギーを自己変身、自己創造、自己変革のエネルギーに変えて、他社に勝つということではなくて、どうしたらより的確に消費者の要望に応えることができる企業活動の体質になっていくのか。ということを考えて、リストラクチャリング、構造転換というか企業内部の姿勢を他社に向けるのではなくて、消費者に向けていって、本当に消費者の要望に的確に応えていくために、競争から出てくるエネルギーを使っていく。そういう仕方で仕事をしていくことも考えていかなければなりません。自己変身、自己創造、自己変革を違った言葉で言えば、業態の転換という風に言うこともできますし、またリストラクチャリング・構造転換という風に言うこともできます。両方ともこれは、他社を相手にして仕事をするという姿勢ではなくて、競争から出てくるエネルギーを会社の組織変革あるいは業態の転換に利用しているという形です。そのことによって競争意識を前面に押し出した醜い企業姿勢から、品格の高い企業精神へと変えていくことができるわけであります。**

**そういう活動していくために今社会はどうなっているか。統合の時代、パートナーシップの時代と言われ、これまでの競争原理により競争して勝つというやり方から、統合とかパートナーシップとか提携とか共生と言われるような言葉が、いろんなものを動かす新しいエネルギーになってきている。このことを我々はよく自覚していかなければなりません。統合とパートナーシップと共生、そういう力を合わせて共に成長していく仕方で経営が今考えられる。そのことによって醜い経営から品格のある経営へと企業の精神が変わっていく時代の流れになってきている。その意味においても、もうすでに勝ち負けを争い、勝とうとする対立的な醜い心情を払拭して、対立という関係性は永久になくならないから、そこから出てくるエネルギーを自己成長のための力に転用していく生き方を覚えなければならない。ライバルがいてくれることによって、自分自身が成長できる。相手を倒す、相手に勝つのではなくて、自分自身が成長するためにライバルの存在を自分自身が利用していく生き方に変えていく。そのことによって、自分自身の表情や意識の中に競争、勝とうとする醜い心情がなくなっていく、そして人間性も成長していく。そうなっていくわけです。そうすることによって社内においても、お互いが勝ち負けを意識するのではなくて、共に力を合わせながら、協力しながら成長していく。あるいは、例え競争という関係性に置かれてしまっても、相手を倒す、相手は蹴落とすのではなく、競争という関係性から出てくるエネルギーを自分の成長のために使うようになり、相手を敵としてみる目がなくなる。そういう職場をつくっていく必要があるわけであります。**

**意識を変えれば、人間の目と表情は違ってきますからね。変革というものを我々は自分の心の中の成長として実現しなければなりません。もう競争の時代は終わったんだ。これからはクリエイトの時代である。そして統合の時代である。力を合わせて共に成長するという生き方を覚えていかなければならない。敵からも学ぶんだ。自分と違った考え方の人間から学んで、自分を成長させて「君と出会えてよかった。君がいてくれて自分はこんなに成長できた。ありがとう」と言って、敵に感謝ができる。それが競争という原理を超越して、そして共に仕事をしていく力をつくっていく方法論であります。良い人間関係をつくろうと思ったら、とにかく勝つことよりももっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することなんだ。成長するとはクリエイトということなんですけど、競争原理から創造原理へと人間の成長、会社の成長・発展の原理を変えていくということをこれから考えていかなければなりません。**

**最後の五番目は、ユーモアのセンス。これも磨かなければならない。良い人間関係をつくっていくために、ユーモアというのは欠くことのできない重要な、人間関係の潤滑油と呼ばれているもの。もっともっと我々はユーモアのセンスを磨かなければならない。人を楽しませるあるいは人間関係の中に潤いとか優しさとか希望をつくっていく力をユーモアと言います。ユーモアとは何なのかと言えば。反対はブラックユーモアですから、こちらは、人に恐怖や不安を与えることを指します。ユーモアとは、それの反対なんですよ。希望とか喜びとか癒しとか安心とか潤い、そういうものを相手に与えることができるような言動です。基本的にはユーモアの中の大きな部分に笑うというものがあって、笑うというのは人間にしかない表情と言われています。笑いとは一緒に笑うと、理性的な考え方の違いとか価値観の違いというのはすっ飛んでしまって、一緒に笑うと一瞬にして相手との間に心の交流とか心の結びつきができる効果を持っているわけですよ。もっともっとユーモアを通して、心の結びつきをつくっていく能力を磨いていかないと、理屈を超える関係性を相手との間に築くことはできない。**

**日本にも落語とか漫才とか笑いの文化は他にもあるんですけど、ユーモアというのは欧米において磨かれた独特の世界で、ちょっと日本人が漫才や落語でやっている笑いとはちょっと違うんですよ。だけども、多くのサラリーマンがお互いに酒を飲みに行ったりなんかしながら、相手を笑わせて、そして心の繋がりをつくっていくことはやっているんですけど、まだまだそれは表面的な笑いであって、本当に心の結びつきをつくっていくことができるような深いものになっていないのが現実であります。ユーモアというのは、西洋映画などを観ていると、追い詰められてにっちもさっちもいかないような状況にあったとき、主役の人間が絶妙なユーモアを飛ばして、皆の心を明るくする。「なんでこんな追い詰められた状況で、こんなすごいことを言えるのかな」と思うような場面が、よく出てくるんですけども。**

**そのことを考えてみると、もっともっと本当のユーモアの中には人間性に対する深い理解と愛が必要だな、ということが感じられます。私が時々申し上げるような、なんちゅうか本中華冷やし中華とか。セントバーナードとか、まぁ、ちょっとこれは、ユーモアというよりもダジャレで、品格のない浅いもの。ユーモアとは言えないもの。だけども、まぁこれもあまり退屈な思いを皆さん方にさせては申し訳ないと思う心遣い、愛を持って考えて言っていることなので、ユーモアの部類に入らないこともないんですけど、あまりにも程度の低いダジャレというかギャグに過ぎない。本当のユーモアというのは、何かしら心に温かさを感じさせるような味わいがないといけないんです。やはりこれはヨーロッパ人の文化から我々が学んで、そして人類の人間性としての成長に結びついていかなければならない。これからアジアの時代なんですけども、だからと言ってヨーロッパ人の文化を下に見るのではなくて、ヨーロッパ文化とアジア文化を融合しながら、世界文明をつくっていかないといけない。その意味でも我々は、欧米人の文化の中から深い教養のあるユーモアを学ぶことも、自分自身の成長の目標にしていかなければならないものだと思います。とにかく、ユーモアの精神は人間関係の中に理屈を超えた心の結びつきをつくっていく重要な原理で、ユーモアは人間関係の潤滑油である。その意味でも、大いに人を和ませるような言動を心掛けることも、素晴らしい人間関係をつくる努力の一端として考えてみてもらいたいと思います。愛の本質を原理にしながら、どうしたら良い人間関係をつくる力を成長させることができるかの方法論についてお話をしました。どうもありがとうございました。**